

22.

自然破壊を叫ばれて前途が暗い思いにさせられる一方で出版界は歳時記ブームを巻きおこしたと見られる。

歳時記は俳人の虎の巻として必携の書である。春夏秋冬の自然現象から人事百般にわたる季題を寄せ集めて説明してあるし例句を添えた書物である。最近では俳人のみならず、各方面にも布衍（ふえん）していて、××歳時記△△歳時記という工合に応用されていることはご存知かと思うが、要するに自分の庇護を忘れることができず、むしろ自然の恵みを認識するためにあるという見方ができる。

自然破壊を反発して起こった機運がこのような一つの形となって現れてきたと、私は喜んで将来の暗さを逆に明るく見通しているのである。

自然を美しく生かすために人間の知恵を高揚して行くことが正しい文化のあり方であって、自然を征服するという増上慢は絶対に許されない。

23.

俳句を作る人は対象となるものをよく観察しなさいとすすめます。

先入観を捨てることです。つまり、自分を空しうして素直に物を見つめていると、きっと発見する驚きがやってきます。そのとき思わず心がときめく、その印象をしっかりとらえて誰かに話しかけたいという気持ちが離れません。

先入観が入り込むと、その発見を歪めてしまい、勝手な注釈をつけがちになり、もう概念的な、きらりとした新しさを失った死物同様に見なされてしまうので、それが恐ろしいのであります。

けれども、見ている方は人間なので、心を持っています。心を捨てることができません。発見によって心が生き生きと活力を表して創作力を生むのです。

物心一如というのは、こういう場合であろうと思います。対象（自然）と人間とがあたかも一体になったような陶々然たる気持ち。それこそそうっとりとさせられる境地ではないかと考えられます。

24.

良い俳句を作る練習には二つあるように思う。

一つは良い俳句を読まねばならぬ。これは良い俳句から学び取り、自分への滋養を吸収する。たとえば古格を知り格調に馴れ、切字の働き、含蓄をもつ言語を選ぶための練習である。であるから古今にわたる立派な作品を鑑賞する。暗記せずともよいがすぐ思い出させるのほどなじんでおけばよい。

もう一つは周囲をよく観察する。いわゆる写生の目を常に向けておく習慣が必要である。句の生まれるヒントは向こうからやってくるのだが、といて棚ボタで待つようではいつまでも来ないのだから、自分で努力して変化する周囲に気をつける。するといろいろな興味を惜しみなく与えてくれる。自然の美の発見や想像が自分をして行為せしめるようにするであろう。

右の二つの練習は、物の本質である大観を捉えることと、作者たる自分の発見創造とをアレンジしつつ上達する一つの方法であると思う。

剣法でいう白眼の構えと青眼の構えとに似ている大事なことである。